

〈追憶文〉

大野君との交友

——偲ぶ会にて——

鈴木 啓 三

本日は、旧制第八高等学校と京都大学経済学部とが取り持つ不思議なご縁からだと思いますが、「大野英二先生を偲ぶ会」にお招きに預かり、皆様と共に大野君への思いを深め、新たにできますことを、友人の一人として大変ありがたく存じております。

彼の晩年の著書『比較社会史への道』（2002年）に、「グリーククラブの思い出」という一章があります。この記事ははじめ、八高の同窓会誌『やつるぎ』（505号，1997年）に寄稿されたものようです。これに拠りますと、彼は八高時代に、愛知一中の競争部の仲間三人とグリーククラブに入っていて、その顧問がドイツ語の鼓常良先生だったようです。当時、八高には文芸作品を募集する企画があり、私は「ゲーテの疾風怒濤時代」という評論のようなものを書いて入賞しました。その選者が鼓先生であり、先生の紹介で大野君はその作品を読み、私を知ってくれたようです。八高時代には、私は大野君と直接の面識はありませんでした。大野君は文乙でしたから、ドイツ語の授業とグリーククラブの顧問ということで鼓先生とは大変近い師弟の関係にあったのだと思われます。

昭和17（1942）年に彼は京大の経済に、私は京大の理学部・化学に進学し、縁あって二人は初めて京大キャンパス内で知り合い、親交を深めていったという次第です。戦後、私は大学院特別研究生として高圧物理化学（high pressure physical chemistry）の立場から、アンモニアと二酸化炭素からの尿素合成反応や、アセチレンを原料に用いた有機合成反応、所謂レップ反応の研究をしていました。これらの研究はドイツが先行していましたが、日本が戦後の荒廃から立ち直る一助ともなればという私の指導教授、帰山先生の願

いを籠めてすすめられました。ドイツは、アンモニアの高圧合成や染料の合成などで夙に世界の化学工業界に君臨していましたし、戦後も極めて活発でした。戦後5年が過ぎて大野君は助教授になり、ドイツ経済史を専攻していた立場から、彼はこうした私の研究体験に興味を持ち、彼の要請で「ドイツにおける化学工業の発展——化学肥料製造を中心として」という内容の話を、その頃彼のゼミで話したことがあったのを覚えています。このことが、彼の交流関係で私の記憶に残る最初のもので出来事です。立場の違う両者の中で、このようなゼミが成り立ち得たのは、お互いの学問領域を理解し、深く信頼しあっていたからであろうと思います。古き良き高校時代の文・理の交わりであったろうかと思えます。

話は変わりますが、卒業研究で、堀場信吉先生から私が与えられたテーマは、「自然現象（物質の状態と変化）を温度と圧力の座標でとらえる」というものでした。その後、昭和30（1955）年に縁あって立命館大学に就職し、これまでの自分の学問的遍歴と関心を踏まえて、当時としては新しい生物物理化学の分野へ進んでいきました。そしてこれらの研究をする中で、生物体も含めていろんな物質の異様な状態や変化を偶然に目撃しました。当初これらの物質や状態は、実験室にだけ存在するものだと考えていました。しかし、地球や宇宙にはそのような温度・圧力条件を充たした場所はいくらかでもあるわけです。われわれの普通の生活環境下では存在できそうにないそうした物質が、海底や土星の衛星などの自然界に存在することが、その後になってあいついで報告されました。これらの自然は、私が実験室で研究対象にしてきた自然とは本質的に変わりません。このような内容のエッセイ、「私にとって自然とは」を2002年に『近畿化学工業界』誌に寄稿しました。大野君に読んでもらいたくて彼に送りましたところ、「高压化学について私共に解説して下さいった当時（半世紀前）のことを思い起こしました」と書き記されていました。半世紀前に大野君のゼミで具体的に取り上げた事象と、このエッセイの内容とは随分違うと思うのですが、「その底を流れる思想は変わらないものだね」と喝破してくれているようで、本当に誠実な良き友を持ち得たことをありがたく思わずにはいられませんでした。

大野君と私との出会いについて、もう一つの大切な出来事があります。比

較的最近のことになりますが、私が八高の同窓誌『やつるぎ』（464号、1994年）に寄稿した「私の疾風怒濤時代」を彼は読んでくれていて、彼の手紙に次のことが書かれていました。「『やつるぎ』を拝見して学兄が学寮で野村弘司君と同室であることを知り、驚いています。彼は京大に入学した頃、マックス・ウェーバーを読んでいて、将来凄い仕事をするを思わせたものです」と。野村君は学徒出陣し、フィリピンで戦死しました。野村君の妹さんが、ここにご出席の小川津根子さんです。そのことにつきましては、小川さんをお願いいたしとうございます。

最後に、一言付け加えさせていただきます。最近、立命館の衣笠キャンパスの図書館に在庫の大野君の著書を調べましたところ、17冊がリスト・アップされていました。その中に『ナチ親衛隊知識人の肖像』がありませんでしたので、入れて頂くように手続きをしたいと思っていますところでは。

ご清聴、ありがとうございました。

立命館大学名誉教授

【付記】 2006年4月22日、京大会館で故大野先生を偲ぶ会がもたれました。そこでのお話を再録させていただきました。——編集部注。